

The Inspiration

Jewelry

ジュエリーの誘惑

BVLGARI / GUCCI / CHIMENTO / GEORG JENSEN
SCAVIA / POMELLATO / ANTONINI / PASQUALE BRUNI etc.

ブランドジュエリーからイタリア新進デザイナーまで
限りないリュクスの世界へと誘う憧れなる輝き

現代作家 夢の結晶・イタリア式芸術鑑賞・美術家画廊情報



ART PICTORIAL 47

Seduzione dei Gioielli
Japanese Artists Review
Stephan Balkenhol

Apprezzamento all'italiana delle opere artistiche
The 38th Nitten
Japanese Artists in the Front

古代遺跡から発掘された貴重なアンティーク・コインをゴールドのチェーンにセッティングしたネックレス。既存のスタイルにこだわることなく、常に革新的な発想でジュエリーを創製してきたブルガリならではの作品。K18YG ¥924,000/ブルガリ 撮影: KAORU



話題の展覧会① アール・デコ展 きらめくモダンの夢 163

イタリア・フェスティバル in 東京ドーム 164

イタリア式芸術鑑賞 165

安達好子 166 / 伊東松孝 168 / 北原喜久子 169 / 立松行雄 170 / 濱村信雄 171 / 落合峯子 172 / 山田典子 173
矢田明子 173 / 伊藤真記 174 / 宮崎節子 175 / 吉田ちとせ 176 / 加瀬佳代子 180 / 池田溪佳 181 / 石毛龍泉 182
富澤翠雨 190 / 木村仁美 196 / 斎藤素琴 197 / 杉本幸泉 198 / 奥山紫苑 199 / 川畑定屋 200 / 鈴木青雨 201
菅谷秀石 202 / 桑名桃華 203 / 鈴木美和子 204 / 谷内美津江 205 / 鶴田美智子 206

第36回日展 優秀作品誌上展

矢竹三智子 210 / 藤井和亮 211 / 弘岡有芳 211

片平圭子 失われた命の美を描く 212

Report from ITALY ゾッポラート=ヴェスコ邸 218

現代美術の視点 [第7回] シュテファン・バルケンホール 222

話題の展覧会② 松井守男展 コルシカに生きる光の画家 224

佐野クミ子 火の穂 225

秀作美術最前線 241

阿部隆三郎 242 / 魚田善夫 242 / 大崎多江子 243 / 奥村千城 243 / 是枝哲也 244 / 鈴木貴子 244 / 中野侑子 245
平藤初代 245 / 堀 郁子 246 / 市川輝夫 246 / 岡本 透 247 / 野島 理 247 / 原 峯夫 248 / 前山裕之 248
西山喜代司 249 / 四宮揚子 249 / 石原真一 250 / 坂本一馬 250 / 片山章史 251 / 坪田墨川 251
有泉秋香 252 / 池田深泉(節子) 252



©Mimmo Lucas Schmitz, Hamburg

【お詫びと訂正】

本誌46にて、表2に掲載いたしました「ドレスデン国立美術館展」のお知らせにおいて、国立西
ドイツ美術館の開催時間の記載に間違いがありました。誤「金・土曜日は午後8時まで」→正「全曜日
は午後8時まで」。お詫びして訂正させていただきます。(日本経済新聞社)

美術画報



Contents

International Artists Review Art Pictorial NO. 47

特集ジュエリーの誘惑 5

宝石の光と力 海野 弘 7

Part1 ブランドジュエリーの煌めく威光 9

ブルガリ つねに新たな挑戦を続ける美の先駆者 10

グッチ 伝統とプライドをジュエリーに託して 20

キメント モダニティを支える誇り高き職人魂 26

ジョージ ジェンセン 日常を彩るシンプルという名の贅沢 30

ジュエリーで読み解くヨーロッパ美術 西岡文彦 38

アルピオンアート ヒストリカルジュエリーの美と感動の世界 40

Part2 イタリアジュエリーの輝ける現在 41

小悪魔と天使の邂逅 42

ルチアーノ・マリオ・ロッシ／アンドレア・ラッツェリーニ 48

スカヴィア ジュエリーの神はディティールに宿る 50

ボメラート 女性を優しく支える美しきパートナー 52

アントニーニ 美の本質を追求する透徹したミニマリズム 53

バスクワレ・ブルーニ 遥かな神々の世界に遠く思いを馳せて 54

グリモルディ／タニヤ・ノイマン 55

ヴァレリオ・サルヴァドーリ／バトリツィア・サルヴァトーリ 56

ADOR ミラノのジュエリー学校を訪ねて 57

ミュシャの幻想世界から生まれたアート・ジュエリー 岡部昌幸 58



現代作家 美の競演 60

市川博美 61／粟生田 登 62／須永みち子 66／伊藤嘉津子 68／井波谷 榮 69／井上孝治 70／岡野郁枝 71

小野田洋子 72／神先御那子 73／川上鹿一 74／川本純三 75／公文隆二郎 76／毛塚米子 77／城田美子 78

辰野敦子 79／田村貴美 80／富澤由美子 81／中澤照子 82／西山千晴 83／萩原勇雄 84／長谷川すみえ 85

北條昭芳 86／松本貞子 87／盛田典子 88／吉井民子 89／吉田美智子 90／三澤芳房 91／漆木弥生 92

大島良作 96／大山一三 98／中島義玄 99／福島千賀子 100／吉井好子 101／すずき ふみお 102／篠原三恵子 103

今井鈴子 104／片岡綾子 105／吉川夏子 106／林 富士子 107／藤川弘子 108／嘉門 碧 109／伊藤國夫 110

小林英生 111／佐藤亮吾 112／武田 清 113／中島 健 114／本馬清珠 115／増井基教 116／渡邊正三 117

田嶋芳実 118／木下明子 119／松原艶子 120／前田光子 124／上園瑞代 125／中村榮年 126／古賀静子 127

酒井歌代子 128／小林ケイコ 130／豆塚君代 131／岸部貞子 132／丸山真由美 133／池上和己 134／崎田光子 135

駒ヶ嶺恵子 136／岡田米子 137／杉山宗利 138／立花健吾 139／野井美佐子 140／中里隆子 142／金子義郎 146

谷先静津湖 147／坂田福恵 148／水谷紫水 158／出口恵山 160／杉谷大坡 161／清水順子 162



〔監修・評論〕
 シルヴィア・ヴェスコ博士 （東洋美術研究所）
 ニコレッタ・チエツリ博士 （ウエネツィア・カ・フオスカリ大学）
 藤瀬礼子 （日本書道専門学校講師）

特集
 イタリア式
 芸術鑑賞

日本におけるディレクタンティズムの美の系譜、
 それはイタリア的観点ではどのように捉えられるのでしょうか。
 日本美術に造詣の深い、
 美術評論家、芸術大学関係者を迎え、
 現代日本美術の秀作を厳選して検証いたします。

Apprezzamento all'italiana delle opere artistiche



コスモスが咲いたよー ● Sono fiorite le cosmee! F50

「コスモスが咲いたよー」は、暗示と比喩の表現によって過去と現在が互いに追いかけてあつていよう。過去は、木造の家に表されているようだが、ただ窓と真つ暗な室内が見えるだけである。外の壁の枯れたヒマワリは、過ぎ去った時、あるいは今や遠い季節を暗示するように思われる。前景の美しく優雅な女性は、謎めいた雰囲気を感じさせ、一束のコスモスを握りしめている。コスモスは家の中の窓を通して見える庭にも垣間見ることができる。女性はコスモスと同じ色味の服を着ており、彼女も花開くかのような艶やかさが窺える。女性の眼差しや、傍らの二匹の猫は、物置いたげに未来を見据えるように見て取れる。技術的に巧みに構成されているほかに、明白にされるべき神秘、解決されるべき謎という魅力によって好奇心を刺激し、惹きつけられてしまう。

安達好子

AICHI, Yoshiko

出身一兵衛。白亜会（同人）。NHK美術大賞入賞。個展2回、グループ展18回、外遊15回。



Mondo d'arte pieno di amore

愛情溢れる
芸術世界



風わたる ● Soffia il vento F20

一方「風わたる」は、繊細な優しさが息づいており、平和な田園風景が子供を抱いた母親を包み込んでいる。優しい抱擁で息子を膝にする女性の悦びに溢れた様子は、彼女を取り囲む童話のような完璧な自然に反映されている。事実、作家が作品を構成するために選んだのは、柔らかな緑の広がり、整然と開いた花々、空の白い雲に触れる丸みを帯びた輪郭の山々でつくられた牧歌的な夢の風景である。子供の眼差し、あるいは美しく和やかな自然の外観からは、温もりが満ちた「癒し」のイメージが感じられる。挿絵のようなこの様式では、作家は構図全体から目を離さずに細部にこだわり、ほかしたを豊かに使いながら色調の段階づけをおこなっている。そうすることで、作品の幻想的な調子を高め、独自の世界を確立させているのである。



愛し合う ● Amarsi 50号

伊東松孝

ITO, Matsutaka

出身＝昭和15年山口県、奈良県在住。



横溢する
豊かな感性

Grande sensibilità raggiante

抱 擁という姿が、簡素だが確たる素材（石、レンガ、野原の背の高い草）で構成された風景に挿入され、強いリアリズムと大きな感動に浸透されたこの作品のテーマをなしている。作家の関心は、無限の優しい抱擁にあり、色彩上の対比においても統一された前景の二人に向けられている。描写された現実には感情的なものであり、二人を囲む曖昧な風景が、さらに男女の愛し合う姿を高めている。この場面に平坦に配分された光も、作家の超現実主義的な探求に貢献しているのだろう。事実、影はなく、彼らを周囲の世界に結びつけている大気の陰影もない。現実の細部はこの瞬間の強度の前では余計なものであるかのようにある。作家は、抱擁する二人に集中して、身を焦がすような愛開気を表現することに見事に成功している。



名残 ● Le rovine rimaste

都 市壁崩れに生き残った古い区域の一隅が、この美しい油彩画に表現されたテーマである。中景には壊れた壁が見られ、そこから、太陽の暖かい金色の光に照らされた藤の花房が垂れ下がっている。時が残酷にも古びた壁に現れているにもかかわらず、作家が描写した雰囲気は、親密で落ち着いており、前景の野草の花がそれを強調しているように思われる。空色の戸、壁に記された裂け目、あるいは崩れ落ちた壁面を通して、今は静かで不動に思われるこの場所がかつてはどのような場所であったかと想像させる。作家が選んだ印象派風の様式は、その古い一隅の意味を取り戻すのに極めて適切であるように思われる。この一隅は、背景にからうじて覗き見られる新住宅の生氣を欠いた影に比べ、生命の光と色を持っている。

北原喜久子

KITAHARA, Kikuko

出身一京都市。妹・太田康平（実弟、イタリア在住彫刻家）。創紀会所属。アヴィニョン大札賞賞、創造の奇蹟大賞。2人展2回、グループ展30回、外遊1回。



Senso del colore eccellente

卓越した
色彩センス



歌舞の舞 ● Danza della gioia F50



ナポレオン ● Napoleone

「歌の舞」は舞い上がった衣装の波が、包み込むような軽い動きとともに画面の表面に柔らかな広がっている。作家は舞のリズムを色彩に移し、純白な衣装とテントの周りに草の緑と空の燃え立つような赤とを回転させている。このようにして、舞い手の旋回によって描写された音楽のメロディーは色彩のメロディーに変えられ、ここでは、音楽と舞の感動が完璧に表現されている。「ナポレオン」では、有名なナポレオ

ンの肖像が美しい銅版エッチングの形で解釈し直されている。オリジナルに忠実であるにもかかわらず、作家はこの指揮官のイメージを非常に興味深く固有の形で描写している。この新たな顔には、悲劇的な運命を予知しているかのような強い視線、優れた決断力を暗示する顔の厳しい線、そして見せかけの英雄の背後で人間の弱さを暴露しているように思われる口の苦々しい線が際立っている。

立松行雄

EATEMATSU, Yukio

出身—昭和15年愛知県。第34回双樹展入選。



Forma di bellezza alla ricerca di essenza

本質を探る
美の形象

徹

喜の舞は舞い上がった衣装の波
が、包み込むような軽い動きと

ンの肖像が美しい銅版エッチングの形で
解釈し直されている。オリジナルに忠実



山間の息吹 ● Il respiro del vento tra le montagne

濱村信雄

HAMAMURA, Nobuo
出身=昭和7年鳥取県。師・井ノ川正真。サロンド・S
代表。日仏現代美術博覧会大ルーヴル宮栄光賞、新世紀富田
芸術祭エゴンシーレ賞特賞、カンヌ国際芸術祭コート
ダジュール国際芸術賞、英国国際美術博覧会日英芸術
平和友好大賞。グループ展7回。

高

津温泉付近のこの美しい風景を描
いた作家は、風の息吹は自然の呼
吸であると我々に告げているかのよう
である。この風景画は、自然の風景に忠実
で正確な再現であるよりも、むしろ心象
あるいは幻想の風景である。作家は、前
景と後景との間の均衡関係にはこだわら
ず、自然の細部が魔術的な光に照らされ
るように描写し、厳しい遠近法から解放
された強烈な風景を創り出している。そ
れでもこの作品は、秋の冷たい空気に包
まれ、それを包み込むような暗さがひと
つになった色彩によって、紅葉の一風景
の雰囲気をよく伝えている。光と均衡の
独自の表現は、事物の輪郭描写を意味に
した暗示的な筆づかいとあいまって、こ
の作品に自然についての奥深い個人的な
解釈を与え、そこでは、作家の精神世界
が自然の風景に反映されている。

Bellezza di natura sprizzata dall'opera

作品に満ちる
自然の美



平和を ● Desiderio di pace 73×51.5cm

落合峯子

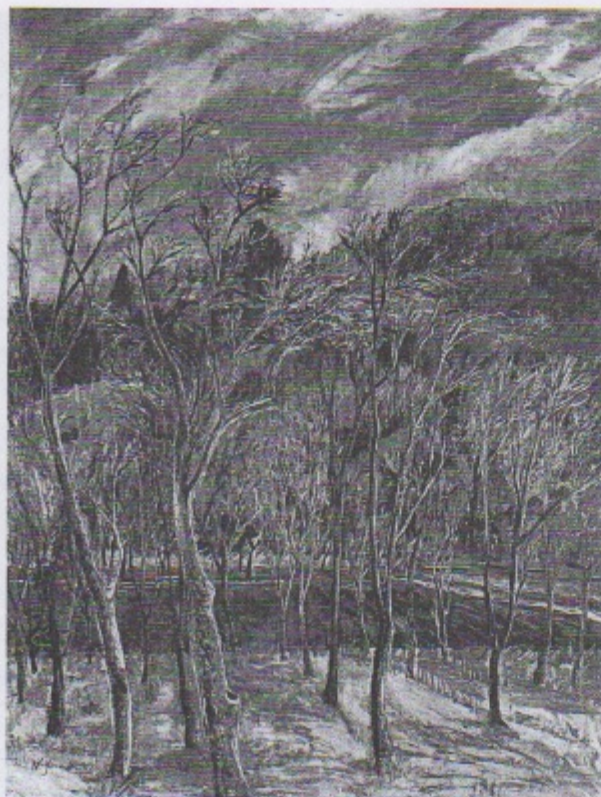
OCHAII, Milano

出身＝昭和17年岩手県。日本美術会会員。第八回京都両面フェスティバル美術展連合会賞、アヴィニョン百景祭美の栄華賞。個展19回、グループ展年8回、外遊5回。

「面」 かいあう「一羽の鳩が多彩な背景に浮かび上がり、画面全体を覆っている「YES PEACE NO WAR」という大きな文字が平和を訴えかける。白い反射光に照らされた鳩は、羽を広げて文字の間を踊り、メッセージの内容を強調するかのように象徴的に伝えている。スクラッチ技法を用いたことで、ポスターや壁の落書きがその内容を直接訴えかける力を持つように、この作品に即時性と表現力を与えている。言葉とイメージの積み重ね、暗い背景から現れる文字、作品の一部をわずかに照らす光のきらめき、それらがカラーシユ作品のように観る者の目を引き、また形を再構成させ、表現された細部すべてに注意を向けさせる。作家は、確かに興味深い作品を創り出すのに成功し、独自の技法にせよ、表現効果にせよ、賞賛すべきものになっている。

Possibilità di nuova rappresentazione di bellezza

新たななる
美の可能性



望山 (初冬) ● Villaggio di montagna (primo inverno) F80

Senso della stagione pieno di sapore

我々の眼前には冬の到来を告げる秋の風景がある。この季節の落葉の雰囲気は、寒色で描かれた前景の木々によって見事に表現され、それが煙や背景に浮き立つ黄色くなった草木にも表されている。作家は、青白い光がかすめた風景、木々の葉を落とす風の息吹、そして緻密で素早い筆づかいを通してつくられた感動を呼び起こす自然のイメージによって、我々を冬の休息に先立つ季節の変化に、確信と繊細さを持っていざなっていく。

山田典子

YAMADA, Noriko

出身一昭和15年栃木県。第81回春陽展、グループ展2年に1回。

趣に満ちた
季節の風情



Soft wave ● Soft wave 36.5X51.5cm

Poesia di bellezza commovente

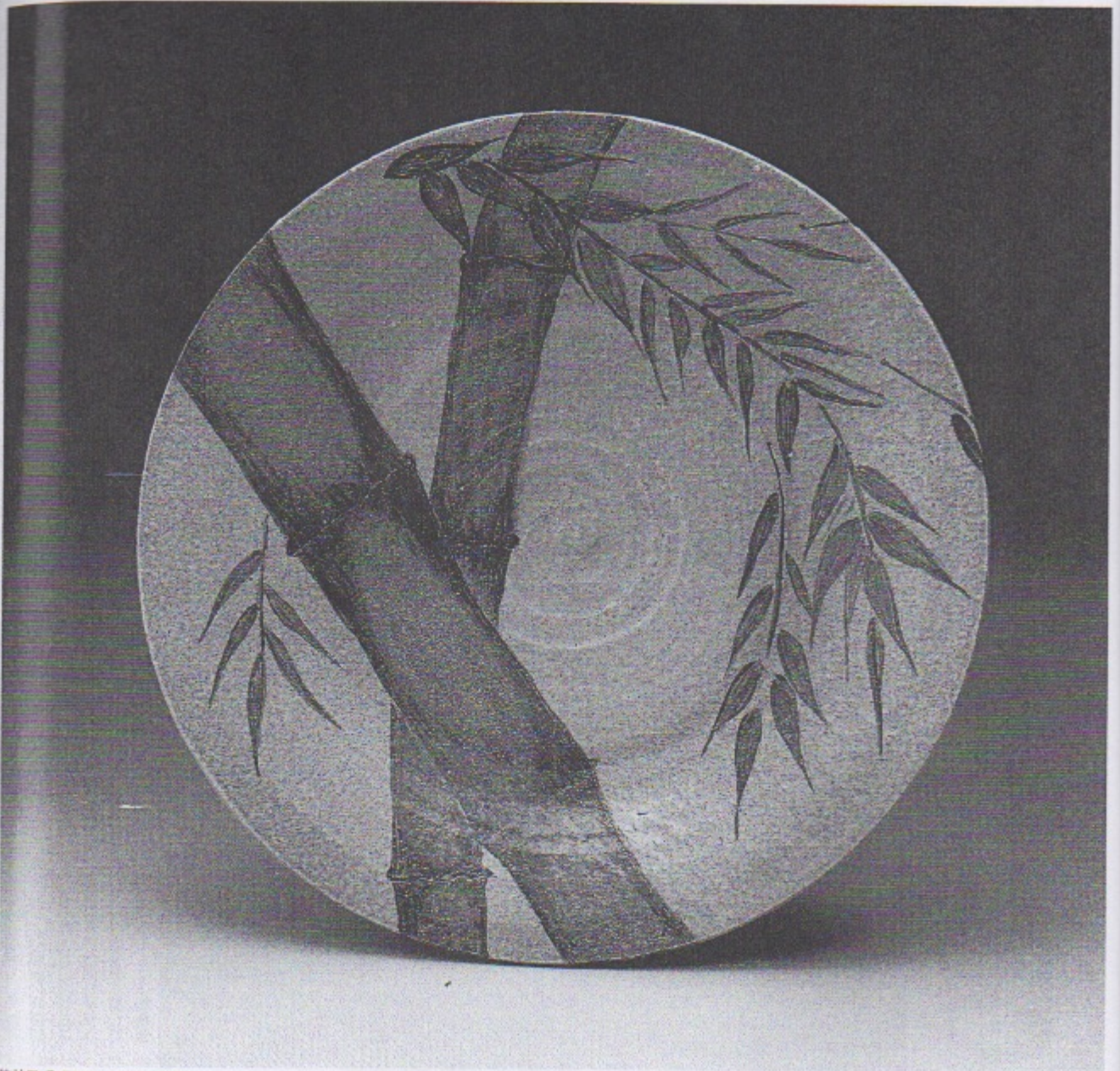
この繊細な水彩画のタイトルは、花の透明さ、とも捉えることができる。三つのガラスの容器を表し、それぞれが異なった手法で花との関係呼び起こす。作家は、背景の非物質的な明るさと前景のガラス容器の幾何学的なポリウムとの間に興味深い対比を創り出している。しかし、そこから生まれる抽象的な感じは、光と色の反射の表現によって超越され、ガラスの造形を細かく強調し、現実的であると同時に詩的な描写に至っている。

矢田明子

YADA, Akiko

出身一青森県。JDPA講師会員、SDP (USA) 会員。2003年フランスパリ美の革命展(ルーヴル展)グランプリ受賞、2004年創造の奇蹟展(知の重要作家認定受賞)、2004年上野の森美術館展入選、第17回日本の自然を描く展自由部門入選、2005年現代手工芸作家協会第22回ニュークリエイティブ展入選。

心を動かす
美の詩情



竹林皿 ● Piatto con bambù

の美しい工芸作品は、陶芸と絵画のふたつの異なる技術が融合され、洗練された作品としてひとつになっている。作家の手腕は、竹の幹という自然を表現するために、陶器のざらざらした質感を利用した点にある。竹の節は陶器表面の粒子の荒さによって最大限に効果を上げ、皿の地色が土の色を呼び起こし、作品の自然らしさを増している。技法的にも、表現上でも成功しているこの作品は、伝統的な竹をモチーフとする絵画の基本的な条件を満たしながら、それを革新的な手法で解釈している。異なる手法で表現されたとはいえ、幹や先細りの葉の表現を構成しているのは、中間色の背景、筆づかいの変化、墨の造形効果であることが見て取れる。全体を暗示するために細部を浮き立たせるという、伝統にふたたび従う構図は極めて賞賛すべきものである。

伊藤真記

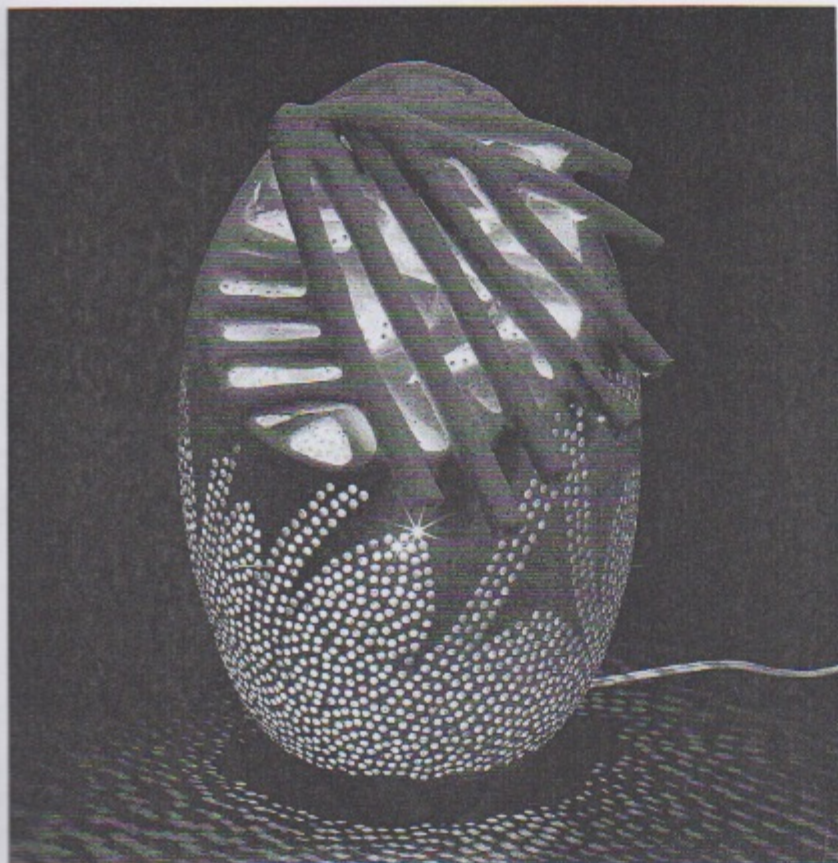
ITO, Maki

昭和38年生まれ。異才大賞（2004年デンマーク）。



Bellezza tradizionale con raffinatezza

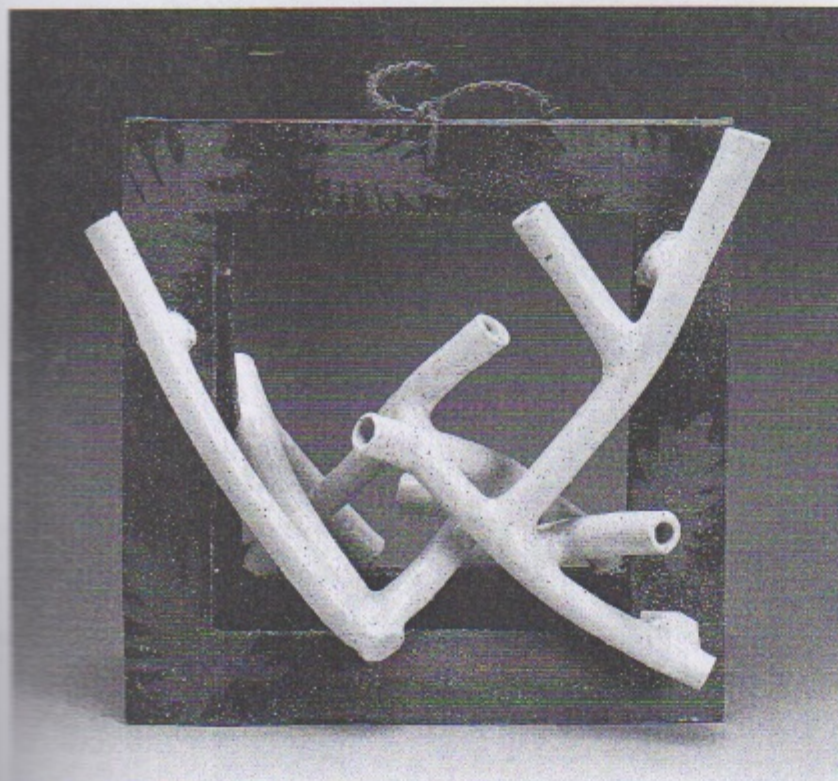
氣品を備えた
伝統美



飛鳥 ● Asuka

「飛鳥」は詩情と表現力の融合傑作である。作家が選んだ形が、象徴的に「種の発展」、「新しい存在を呼び起こす卵」であることに心打たれる。比喩的に解釈すると、完全に開くのを待つこの殻に、日本の国の象徴的な場所、あの美しい飛鳥平野だと捉えることができ、そこから未来の日本文化が芽吹く卵として表現されている。しかし、作家が我々を招く連想遊戯は、鼓動を打つ心臓のイメージも呼び起こし、生命の中心としての飛鳥、その動脈から他の部分に生命が

発散された飛鳥をも思わせる。「花器コーラル（珊瑚）」においても、作家の優れた技量が示されている。コーラルの滑らかな表面は、海水の中の反射光で照らされているかのような一方で、四角い枠の輪郭は深海の暗い海底を思わせる。枠の外へはみ出している交差した枝の動きは、デザインされた幾何学的な明確さとともに、対象の優稚さを強調し、花器という機能を越えて、それ自体が創造物であるような、賞賛すべき美術品に変えている。



花器コーラル（珊瑚） ● Vaso per fiori in forma di Coral (corallo)

Rappresentazione piena di creatività

宮崎節子

MIYAZAKI, Setsuko

出身一昭和23年高知県。1997年陶芸を始める。2000年個展、陶芸ジャパン2000アマチュア陶芸コンテスト佳作、第25回日輝展入選、02年奈良県展入選、03・04年笠間

2003アマチュア陶芸大賞入選、04年創立30年記念日輝展入選、デンマーク芸術世紀フェスティバル「創造の奇蹟」展入賞、日輝会会員推荐。陶房「葉子」主宰。個展1回。



創造性に満ちた表現



優雅なひととき ● Un attimo di eleganza [図案参考「源氏物語」]

優 雅なひととき」は、優雅さ、探求遊びが主要テーマであろう。それは、主題や素材の選択、装飾要素の使い方にも見られるように、古代の優雅さである。この制作の題材は「源氏物語」であり、貝殻の内側に洗練された表現で完璧にミニチュア化されている。花の装飾を施した箱は落ち着きがあり、その模様が見事に配分され、漆の蒸騰らしさを思わせる滑らかな黒い背景から浮き出ている。一方、目録上の絵の背景をなす金箔の輝かしさは、桃山時代の高価な屏風絵を思わせる。物語の風景がその上に配置された金箔の滑らかさと人物の明確さは、すぐに物語を明白に読み取らせると同時に、遊びの要素を大きな美的悦びの対象に変えている。古代の遊びが美術品に変わるといふ考えと制作上の配慮が、この作品の価値を高めているのである。

吉田ちとせ

YOSHIDA, Chitose

出身=昭和20年(1945年)大阪府。師・吉野奈々子(アメリカンハンドークラフト協会講師)、杉本陽子(日本デコラティブペインティング協会講師会員)。アメリカンハンドークラフト協会講師、日本デコラティブペインティング協会(JDPA)講師会員。個展2回、グループ展毎年2~3回。



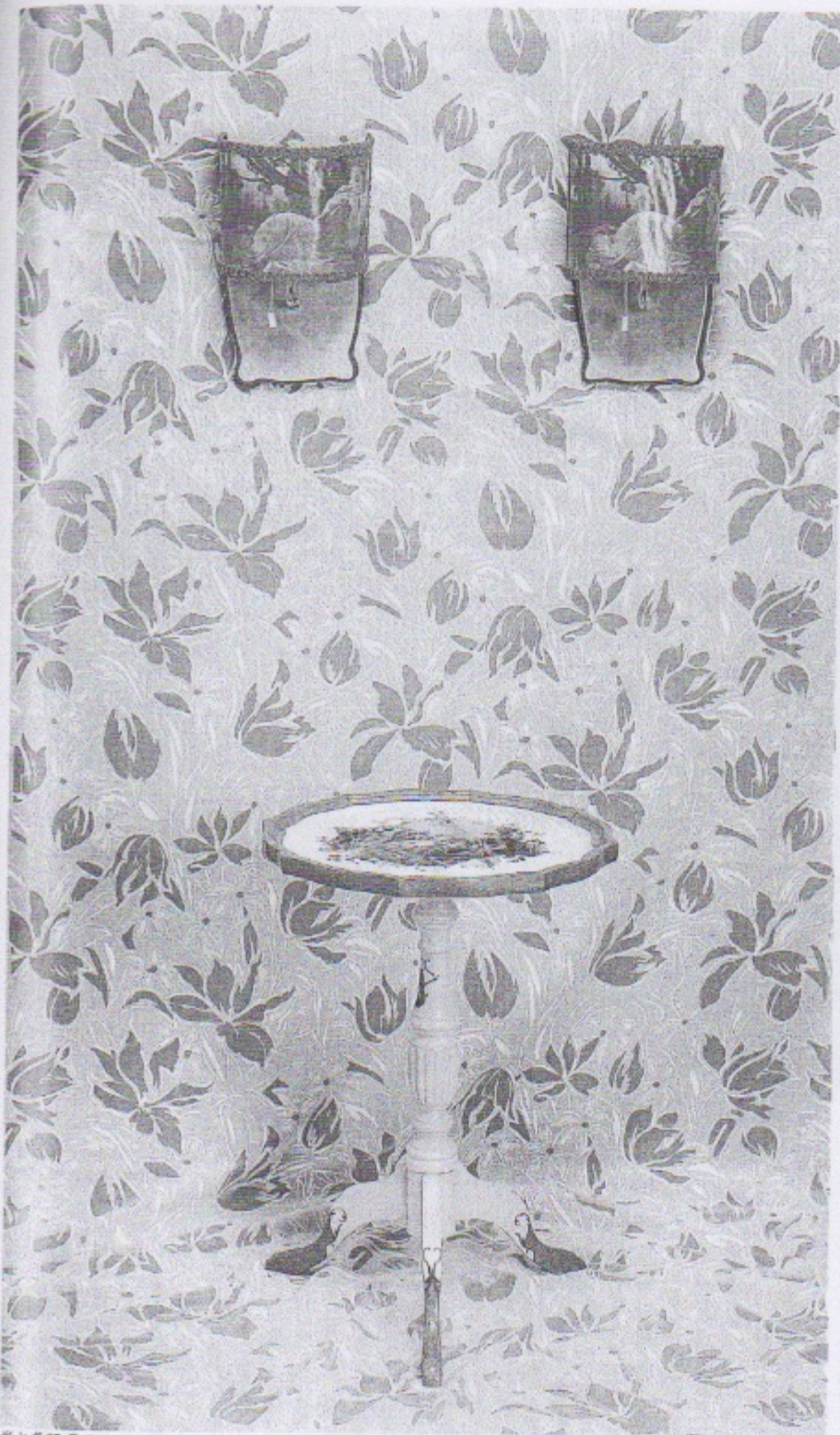
Bellezza elegante e raffinata

洗練された
優雅な美



ハリー ● Harry

「ハリー」は、木の断面と思われる不規則な形の枠組みを素材にして、作家の愛犬ハリーをアクリルで描いた、肖像画の自然主義的範疇といつてよいだろう。木目の褐色の色調が、犬の純白と真っ黒な毛並みを際立たせるための理想的な背景をなしている。作家が獲得した美しい三次元的効果のおかげで、犬は鼻面を絵の枠から突き出しているように思われる。犬の毛並みの正確な表現は、ほとんど画法の手本のようにあり、頑丈な体格と毛の密度が、この犬の首の柔らかい鬃に手を入れてみたくなるほど完璧なリアリズムで表現されている。目のまわりに描かれた白い部分、三角形の美しい鼻、立った耳、優しくて注意深い眼差し、これらはすべて犬を飼っている人にはよく知られている特徴であり、この場合には、作家の才能によつてのみ描かれたのではなく、特に主人の愛情深い目で描かれている。



光と希望 ● Luce e speranza

「光と希望」では、この作家は、古趣味で解釈された小テーブルと一対のランプシェードというふたつの異なる事物を通じて過去に対する自分の関心を表している。選ばれた様式は、装飾の軽やかな優美さの特色を持つロココ最盛期のものである。小テーブルの装飾は卓上の優雅な花模様にある一方、一対のランプシェードの装飾は赤を背景に横たわる女性の姿が描かれているようだ。作家は、

ロココ美術を象徴する装飾趣味を再生するためにデコパージュという技法を用い、興味深い優雅な作品に仕上げている。過去の、ある時代の趣味による日常使用の事物、あるいはランプのように近代的なもの改作は、形が似ているためばかりでなく、作品が伝える、あの遠い世紀の美術と文化の精神を完璧に具現化した楽しみという意味においても、成功した作品であろう。



左作品のテーブルトップ

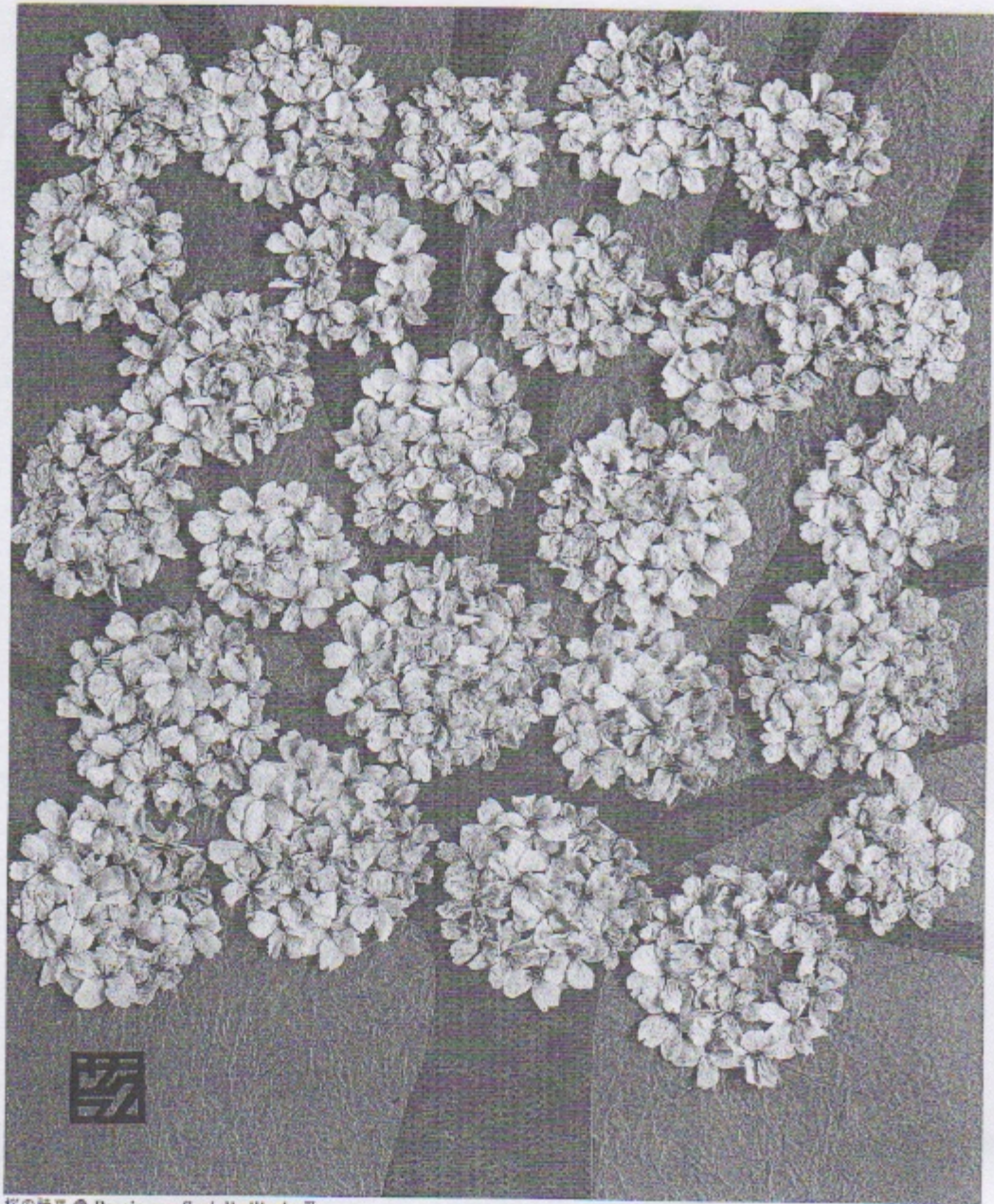
吉田ちとせ

動 きのある優雅な額縁が、聖母子像が占めた空間を囲んでいる。金箔の施された縁、マーブルの効果を持つ白っぽい縁、内側に形作られた枝状の装飾モチーフが、作家のインスピレーションの源を代表するロココ美術の特徴的な要素である。描かれた額の細部を見ると、上方に隠れた紋章モチーフ、下方にはフットのある牧歌的な風景が配置されている。これらから、作家が十八世紀美術に

普及していたテーマやモチーフを熟知しており、オリジナル作品についての配慮と自然らしさによって、それらを組み立てるのに成功していることがわかる。また、鏡に描かれた内部の聖母子像を交換することで、また違った印象の作品を創り上げることが可能である。最後に注目すべき点は、制作の技法上の注意深さと手工芸の性質を持つデコパージュ作品に最高の喜びを吹き込んだことである。



鏡の前で ● Davanti allo specchio



桜の詩 II ● Poesia con fiori di ciliegio II

加瀬佳代子

KASE, Kayoko
出身=昭和2年神奈川県。



技

法が混在したこの美しい工芸作品は、グラフィックの本質をコラーージュの装飾的効果に結びつけるのに成功している。桜の木のテーマは、まず木の単純な構造の表現にある。硬くて調和のとれた骨組は、灰色の背景に対照的な赤い紙に託され、秩序ある枝の幅み目を描き、それが紙の境界を越えようとしているように見える。泡のように花が枝に現れ、生命と美を生気つけている。花開いた茂みの三次元の効果も、幹と枝の線に快い動きを与え、春の自然の開花という考えを文字通りに伝えているように思われる。作家は、単純でわずかな素材（花びら、紙、ビーズ）を選ぶことによって繊細さを表している。花を再現するのに木物の花弁を使ったことは、作品に詩的な潤子を与え、桜のデリケートな開花を反映したものにはかならない。

Sublimazione delle ricerche giornaliere alla bellezza

日々の研鑽を
美に昇華

引く波のあと美しく、校貝。——十一
字を各幅に一行で書き下すという
難しい構成を、巧みな連筆で秀逸に仕上
げた。墨色の変化や潤筆から濁筆への移
り変わりは、寄せては返し常に変化し続
ける波の情景を脳裏に思い起させるかの
ようである。文字の一つひとつは比較的
小さくまとめられているが、美しく、を
料紙中央に置き、大きく書いたことで安

定感を出した。また、その文字造形は実
に優美である。漢字と仮名が入り混じっ
た歌だが、漢字の持つ柔らかな線条が十
分に生きているため違和感がない。
「校」で墨継ぎをし、濃墨で小さく書き
止められた「貝」には余韻を感じる。ま
つすぐに通った中心線と左右均等な余白
が、作品に自然な形で整然美を与えてい
る。

引く波のあと美しく、校貝。

池田溪佳

IKEDA, Keika

ハブスブルク芸術友好協会委員会特別栄誉賞、コートダ
ジュール国際芸術賞。

俳句 ● Haiku

Il riverbero delle linee sottili

柔らかな
線条の余韻

【秋】江送別爲戴友諒賦は、漢詩七言八句を五行に老練な行草体で書写している。

「蕭々落葉早寒天」の起句から変化に富んだ筆鋒で情趣が深く、「忽送秋聲到耳邊」の第二句からしだいに躍動感を高め、三行目の「青山紅樹環家路」に至り筆の動きは最高潮を見せる。長く書ける修練をした書家の筆で、枯れた線条は興趣

に満ちている。作家は自信をもって自分の文字を精いっぱい書いており、人の真似はしていない。独特の風格が感じられ、自然を詠した時らしい清爽感がある。終句の「白頭重話請居年」は特に情趣が深く、それぞれの文字に作家の想いが見えるように生彩感が漲っている。堂々とした漢字作品で、見事な一幅である。

蕭々落葉早寒天
忽送秋聲到耳邊
青山紅樹環家路
白頭重話請居年
白頭重話請居年

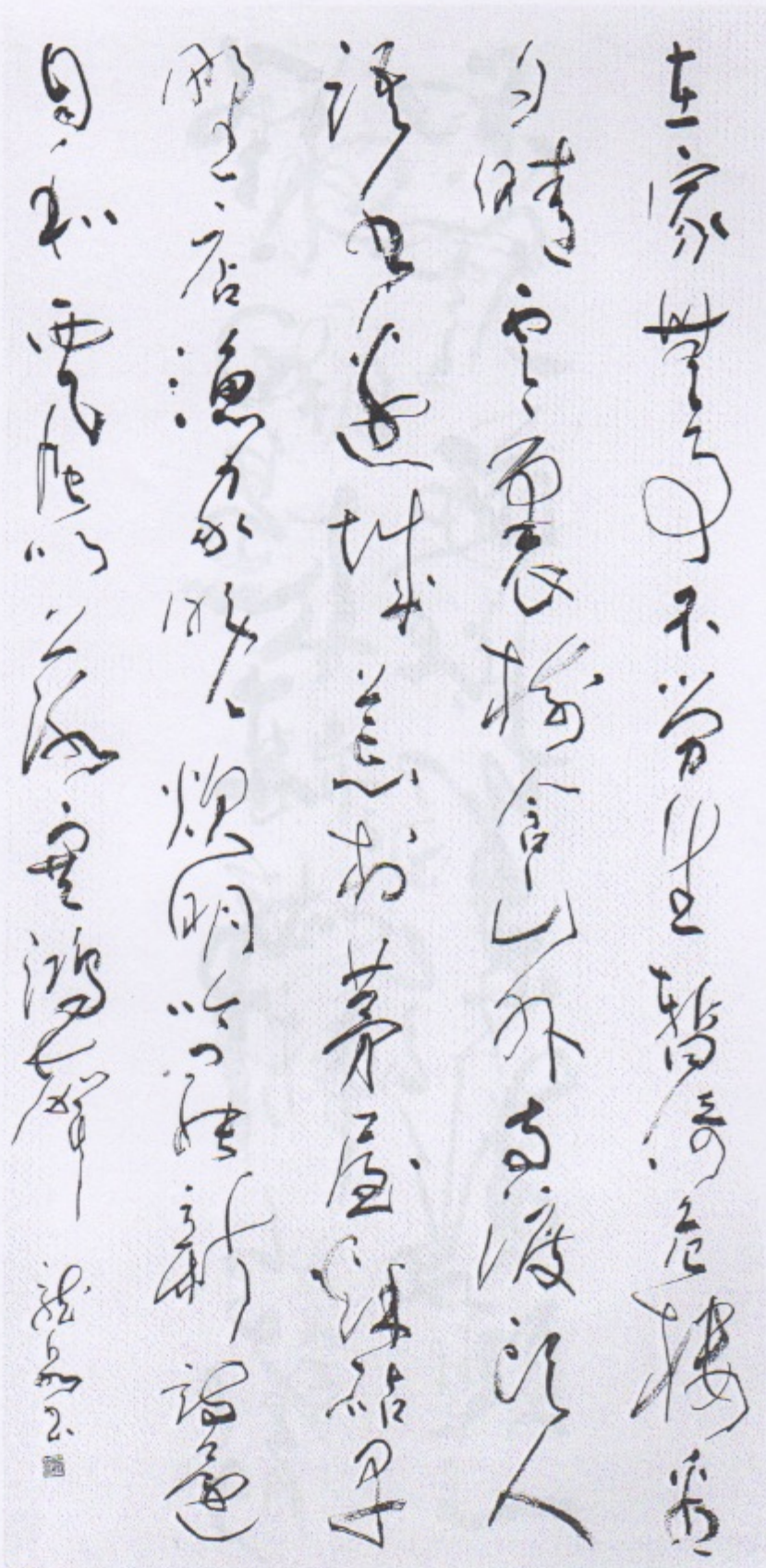
石毛龍泉

ISHIGE, Ryusen
出身一大正13年。外遊1回。

秋江送別爲戴友諒賦 © Possia in stile cinese

Lo splendore e la freschezza di uno stile personale

清爽な風格が冴える



西樓晚紙 ● Poesia in stile cinese

「西樓晚紙」は、漢詩七言八句を爽やかな細線を主として流暢な筆で押巻している。変化に富んだ行草体で、躍動感に満ち、鮮やかな筆鋒である。
『在家無事不勞生』から軽やかな線条は料紙上を自由に乱舞するように動きを

見せ、二行目の『雲裏樹含山外寺』など爽快感に溢れた筆でこの詩を爽やかに書写している。作家は自然を詠じたこの詩の清爽感を表現すべく、細い線条を駆使して独特の蒼潤気を表現しようとしたのであろう。『壁店漁家晚炊明』の爽快な

筆致はこの詩の風情を表現するのに最適といえる。
独特の作風と書くことのできる作品で律動感豊かな細い線条は精彩に溢れ、情趣に満ちている。老練な筆力が感じられる委細である。

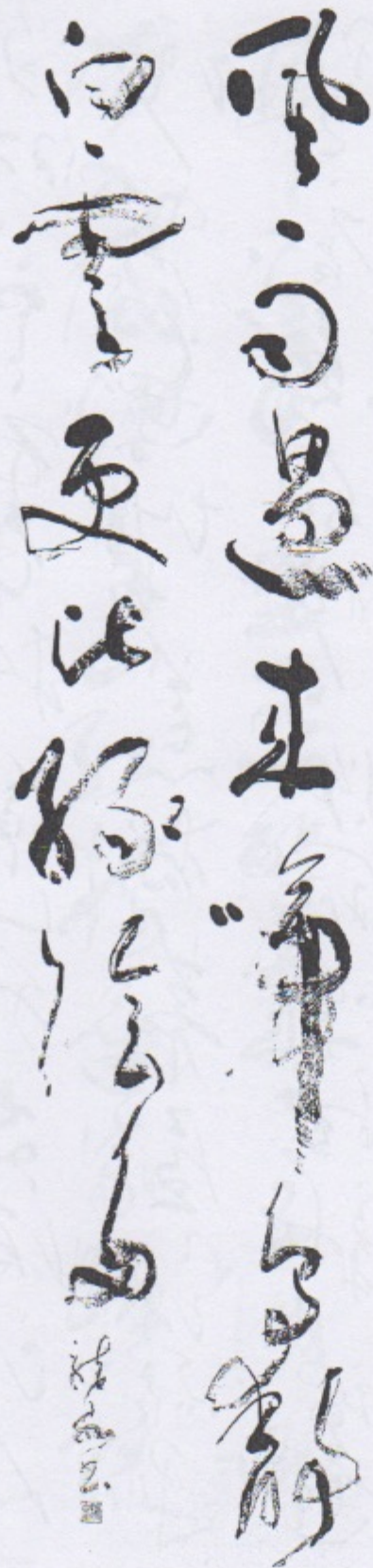
江注別巻友誼賦」は、漢詩七言

に満ちている。作家は自信をもって自分

「夏雨新霽圖」は、張翥の詩七言二句を二行に書写した一幅である。濃墨の湖筆と渴筆の線条が美しい調和を成し、律動感に富んだ鮮やかな作曲であり、清爽感に満ちている。

『風雨過來啼鳥靜』の爽やかな一句は落し着きがあり、線条の変化も多彩である。『風雨』の特色のある造形は熟練の

筆で、文人趣味豊かな詩の風情を気品高く書写している。『啼鳥靜』の変化に富んだ渴筆の線条は生動感があり、造形も巧妙である。二行目は一段と躍動感に満ち、詩の叙情性を興趣の深い筆鋒で表現している。最後の『綠陰多』の独特の風格のある造形も趣が深く、叙情性豊かな余韻である。



夏雨新霽圖 ● Poesia in stile cinese

石毛龍泉

雨

述」と題された二幅は、漢詩七言二句を流暢な筆で二行に揮毫している。

「不見前年東海頭」の第一句は潤墨の筆で鮮やかに書写され、律動感に溢れている。「年・海」などの造形には爽やかな風情があり、老練な筆である。二行目はさらに躍動感に富んだ筆を揮い、「夜潮来跡如掃」の変化に満ちた筆姿は老巧

不見前年東海頭
夜潮来跡如掃

石毛龍泉

で余情が深い。「夜・来・掃」の独特の筆鋒は魅力的で、詩の情趣を格調高く表現している。行間の余白も適切で、変化に富んだ墨線がくっきりと浮かび上がり、見事な構成である。「不見・東海頭」「潮来」のやや太い筆姿がアクセントとなり、全体を起伏に富んだものにしてている。大らかな詩情に満ちた作品である。

雨述 ● Poesia in stile cinese

夏
雨折霽圖」は、張翥の時七言二句を二行に書写した二幅である。濃

筆で、文人趣味豊かな詩の風情を気品高く書写している。「帝島靜」のまじり

「偶」の一幅は、清爽感に満ちた明るい線条が躍動し、見事な作品を構成している。「霜は一夜にして緑のハスを切り破り、秋の雨は真珠にならぬと彼をたぶらかす」という意味の詩で、作家は鮮やかな筆を揮っている。

「夜緑荷」はくつきりとした線条が秀麗で、短い「一」の横画が爽やかである。「霜剪破」の三字も豪放に書かれ、

堂々とした風格を備えている。二行目は「秋雨」の二字が華やかな造形で、律動感に富んだ筆である。「不成珠」は爽やかな細線を用いて重厚感を感じさせず、生動感に満ちた線条は枯れた味がある。柔らかな細線が独特の風情を醸し出し、個性的な文字造形も興趣が深く洒脱な条幅である。

一
夜
夜
雨
剪
破
霜
剪
破
霜
剪
破

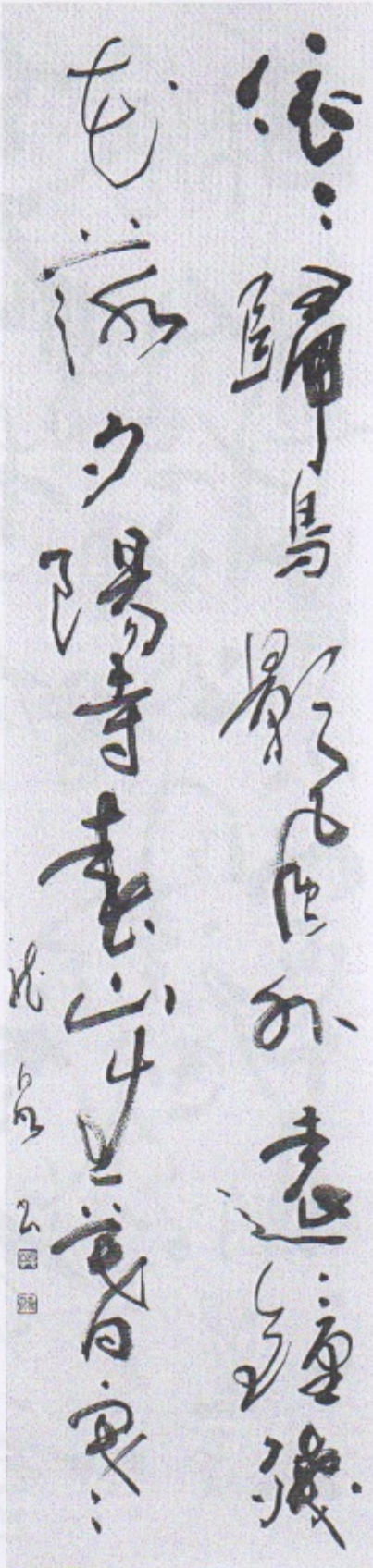
偶題

偶題 ● Poesia in stile cinese

石毛龍泉

【題】と題した作品は、余韻縹々とした漢詩五言四句を老練な筆で二行に揮毫している。

起句の「依々たり蹄鳥の影」は「依々」の二字に情趣が深く、この作品全体の風情を象徴しているかのように冴えた筆鋒である。「依々」とは懐かしく忍びないようすを形容した語句で、この起句の二字だけでも綿々とした情感が伝わってくる。第二句の「風外遠鐘聲」からは筆の



雑語 ● Poesia in stile cinese

動きは大きく躍動し、「花落夕陽寺」に至り筆鋒はさらに高揚し、終句の「春山生暮寒」は枯れた線条に限りない詩情が滲っている。

時に異色の条幅ではないが、洗練された線条は趣が深く、その文学的造形は老巧で情感が滲み出ている。連綿はほとんどなく、単体の草書の線条には枯淡な趣がある。

【題】の一欄は、清爽感に満ちた明

堂々とした風格を備えている。二行目は

湖 口送友人の一編は、七言二句を
個性的な筆鋒で二行に揮毫してい
る。

去雁送冲夢雪。は独特の線条に風
情が深く、特に「雁」の躍動的な筆線、
「冲」の筆の割れを生かした目事な縦画
など、この詩を表現するのに充分な筆力
が感じられる。また「夢」の崩れるよう
な造形には洒脱な味がある。二句目の

「離人獨上洞庭船」は一段と自由な筆で
のびやかに書写しており、独り洞庭湖の
船に乗る人の孤独な心境が漂っている。

一気呵成に筆を揮い、作家の鼓動が伝
わってくるような迫力がある。草書作品
だが連綿はまったくなく単体の文字を丁
束に書写しており、爽やかな雰囲気漂
っている。文字配置も適切で余白が美し
い。

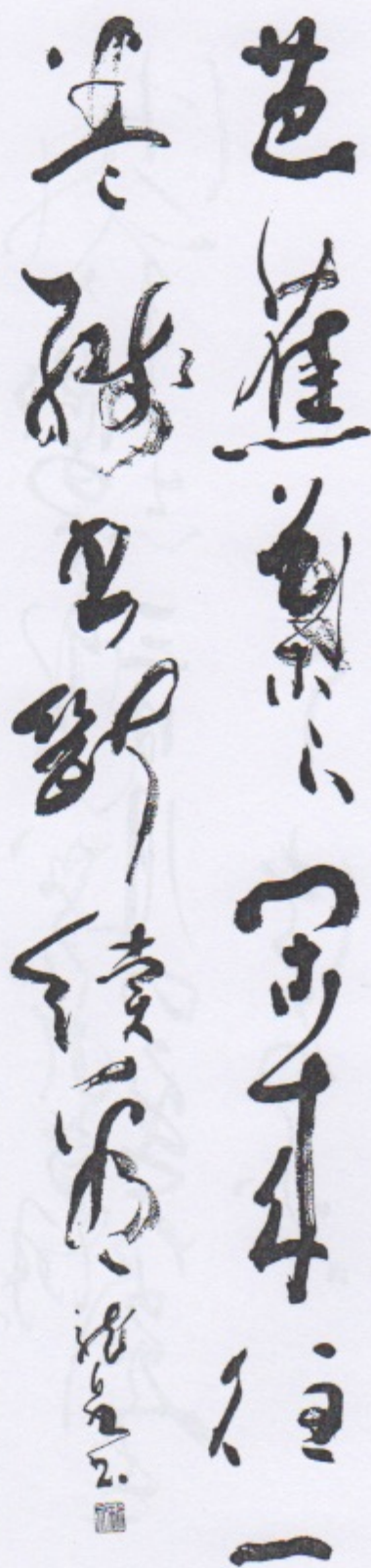
去雁送冲夢雪
離人獨上洞庭船

湖口送友人

石毛龍泉

「春」は許友の詩七言二句を独特の個性的な草書で二行に揮毫した条幅である。

芭蕉集下開來往一卷殘書斷續看の悠然とした詩を老巧な筆鋒で華麗に書写している。芭蕉の二字は爽やかに書かれ、筆鋒はしだいに高揚し、二行目は最高潮を見せ、素晴らしい躍動感に満ちている。作家は力強く速度感のある筆で大



胆に揮い、生動感に溢れた一冊を完成している。初行の「開來往」の堂々とした濃墨の線条は力強く、律動感に溢れている。二行目はそれぞれ単体の文字が鮮やかな変化を見せ、その潤濁の線条は流麗で、氣勢に満ちている。その造形も興趣が深く、雄爽として風格があり、清爽感に溢れた作品である。

春日園居 ● Poesia in stile cinese

湖
口送友人の二幅は、七言二句を

・睡人獨上洞庭船 一段と自由な筆で

鳥島 水赤彦の歌を三行に書いている。大きな文字で紙面を埋めているといった印象である。したがって文字群の黒色と余白がはっきりとしていて、一種の雰囲気を持っている。

第一行目はまっすくに書き下し、第二行目では若干右に流して第一行目に寄り添う形である。大胆に行頭の文字を大き

く書いて躍動的な作品に仕上げている。とりわけ大きく書いている文字はみな渴筆にして、重くならないように配慮しているようである。また文字の意味を斟酌した表現であり、*さむし*、*うつろふ*、*だけ*を渴筆にしたのも、あらかじめ計算してのことであろう。

湖の
ちりばちり
三日月のまなまを
うきまを

富澤翠雨

TOMIZAWA, Suir

出身一大正13年群馬県。師・松岡翠風、中島愚水、田村翠堂、田村華舟。書道芸術院審査員、群馬県展委嘱作家、前橋市民展委員、群馬教育書道展審査員、専光会理事。書道芸術院展特選3回、前橋市民展賞、県展員議会議長賞、20世紀芸術世界賞、日本文化伝道士、グループ展21回。



鳥木赤彦の歌 © Poesia di Akahiko Shimaki

L'originalità di una linea fluente ed elegante

独創的で
流麗な線条

志貴良子の春の詩

なまら花もあはる

なまら花もあはる
春

万葉集一の巻八、志貴良子の春の詩
れを素直に喜んだ歌を料紙にま
めている。構成を二つに分け、第一行目
が一つ、第二行目から第五行目までが一
つである。品の良い、落ち着きのある表

現形式で、第一行目は程よい幅量にまか
せ筆を運んでおり徳先の自然な動きで一
息に書き上げているのが気持ちよい。つ
ぎに余白を設けその流れを押しとめて
から、第二の文字群へ入る。ここでは湯

筆のほうが多く占めているが、作品の全
体を眺めたときにはじつに調和のとれた
ものとなっている。また数箇所、転折部
をつよく折り曲げたようなところがあ
り、筆端の剛勁さが表れている。

万葉の歌(春) ● Poesia dal Man'yōshū (primavera)

木赤彦の歌を三行に書している。

く書して躍動的な作品に仕上げている。

田村
光会理
前橋
賞、20
三博士。

内で
線条

【新】古今和歌集一の藤原良経、後鳥羽
上皇、式十内親王の春の歌三百を
つづけて書した作品である。

四行の額は整然と並び、下部は右から
左に上がっていくというまどめ方をし
ている。潤滑のバランスをみると、どちら

が多くどちらが少ないということはなく
ほぼ均しいようであり、隣接する行との
間隔を意識して同じ表現が重ならぬよう
配慮している。連綿は二字から四字、草
書体を多く用いている。書風は簡朴、男
性的な力強い美の要素を包含している。

【新古今和歌集】を代表する歌人、男性
二人、女性一人の歌を選んで作品にして
いる作者の感性を遺憾なく発揮する表現
形態ではないだろうか。

こ吉野はしもうたやうとてあまのゆり
とあまのまをたむきありていと京あま
をにやまのきこふはるる山あまのゆくは
こまもはるるはるるはるるはるるはるる

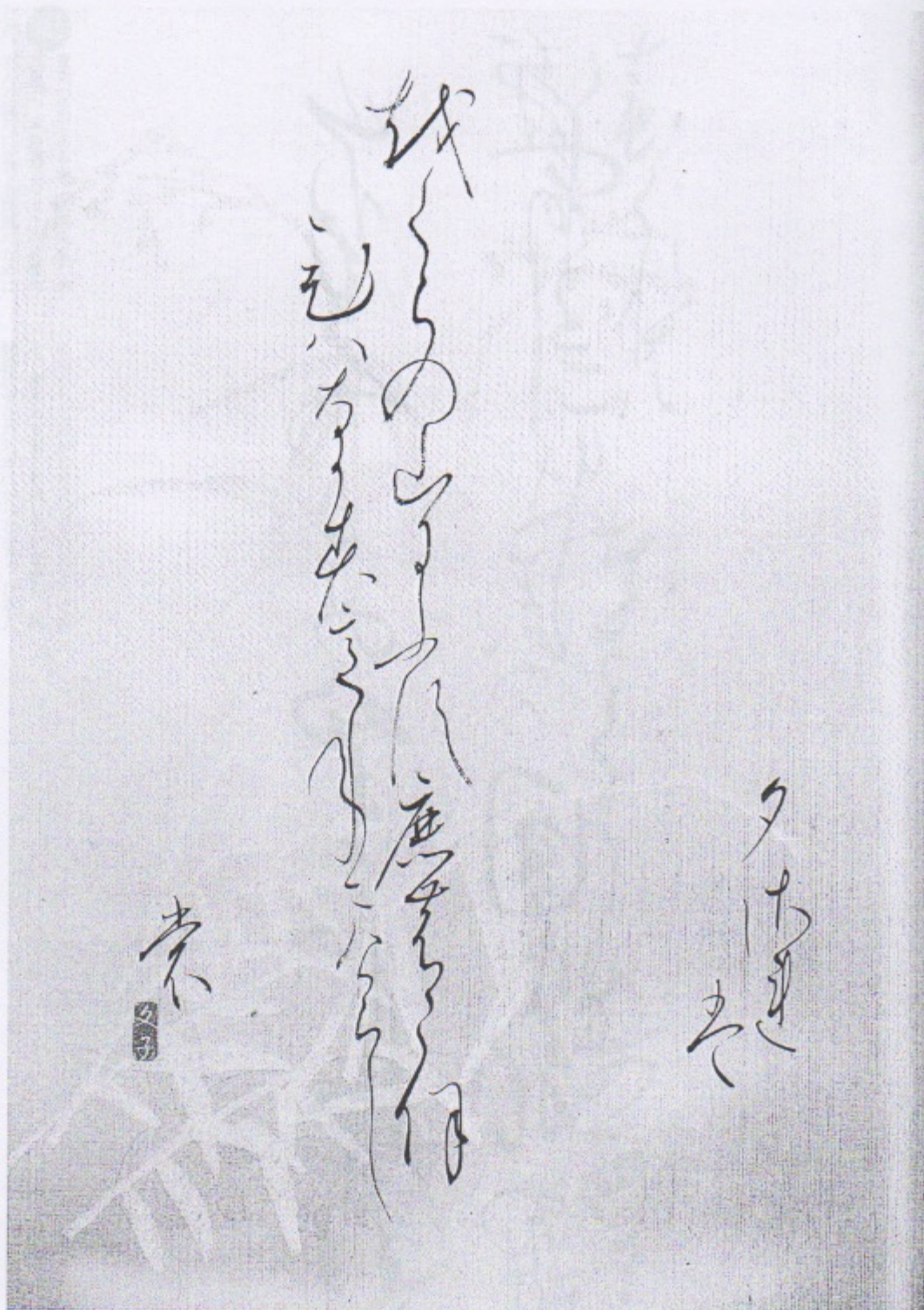
新古今和歌集春の歌三首 ● Tre poesie di primavera dallo Shinkokinshū

富澤翠雨

『万葉集』の巻八、舒明天皇の御製歌を
はつきりとした墨色で書いているのが印象的である。この歌は腕の音が
聞こえないのを詠んだ万葉調らしい響きを
たたえた名歌である。紙の色合いと書
風が渾然一体となって小倉山の夜のような

すを連想させ、なんともいえない空闊感を
醸し出している。文字群は三つに分かれ、
五行で書かれている。中心、二行の文字
群を基軸に間を空けて左右に少字を置い
た構成であるので、右に大きくとられた
空間と、左の余白が美しくこの作品を演

出している。またその空間に對する中心
二行の接近した書きぶりも絶妙である。
『万葉集』を意識してか草書体を多く用
いているが、連絡は軽妙な趣があり、墨
量も自然である。筆力の充実も窺うべ
きものがある。



万葉の歌(秋) ● Poesia dal Man'yōshū (autunno)

『新古今和歌集』の藤原良経、後鳥羽
上皇、式子内親王の春の歌三首を

が多くどちらが少ないということはなく
ほぼ均しいようであり、隣接する行との

『新古今和歌集』を代表する歌人、男性
二人、女性一人の歌を選んで作品にして

自由 然を心から愛し、寂寥の境地に心を遊ばせた歌人、若山牧水の歌を自由に筆を運ばせ、自らもその境涯に触れてみたような、そんな作品である。二行で密な構成、書き出し部分と最後にやや余白をとり、行間にも一筋の空間をもつてその調和を図っている。結体、用筆ともに大胆で、五文字目の「や」、「ふ

もとに」の「に」は大きく、形は自由であり、第二行目に至って「春の」の緊密なこと甚だしく、全体を通して心の柱くままに書いているといったふうである。線条の肥瘦も変化に富み、筆力勁健、古風によらず、現代短歌としての書表現を念頭においた果敢な姿勢を吐露するものである。

春の
 花を
 見れば
 涙も
 枯れ
 ぬ
 春の
 花を
 見れば
 涙も
 枯れ
 ぬ

若山牧水の歌 ● Poesia di Bokusui Wakayama

富澤翠雨

〔礼〕

貫之の歌であるが、仁明天皇の第五皇子、本原親王の七十の祝賀のとき、主人の後ろに立てる屏風のために詠んだものである。屏風絵の面装として詠まれたといわれている。歌そのものは貫之としては平凡なものであるが、たいへんおめでたい歌を作者自ら選び作品にしている。作品をみるにそのおめでたい歌意を汲んでか、表現は華麗でデザイン性豊かである。扇の要のように下部中央よりやや右に重心を置き、ここから上方

に向かって広がり伸長していくようである。縦長の紙面を利用しながら、放射線状すなわち末広がりとなり、日本人の好む形式を帯びている。なんといいてもこの作品はデザインの巧みなところに成功があり、型にはまった形式美を脱し、作者独自の美意識をものに具現化している。潤濁の使い方も奇抜で書き始めを濁、終わりを潤でおさめている。し、を長く引いたところに文字を重ねるといふ感性はまさに奇才である。

貫之の歌
仁明天皇の御
五皇子の御
七十年の御
祝賀の御
時
主人の御
後ろに立て
る屏風の御
ために詠
んだ御歌
は
平明な御
歌である
が
たいへん
おめでた
い御歌を
作者自ら
選び作品
にしてい
る
作品をみ
るにその
おめでた
い御歌意
を汲んで
か
表現は華
麗でデザ
イン性豊
かである
扇の要の
ように下
部中央よ
りやや右
に重心を
置きここ
から上方
に向かっ
て広がり
伸長して
いくよう
である
縦長の紙
面を利用
しながら
放射線状
すなわち
末広がり
となり日
本人の好
む形式を
帯びてい
る
なんとい
ってもこ
この作品
はデザイ
ンの巧み
なところに
成功があ
り型には
まった形
式美を脱
し作者獨
自の美意
識をもの
に具現化
している
潤濁の使
い方も奇
抜で書き
始めを濁
終わりを
潤でおさ
めている
しを長く
引いたこ
ろに文字
を重ねると
いふ感性
はまさに
奇才であ
る

翠雨

紀貫之の歌 ● Poesia di Ki no Tsurayuki

自然を心から愛し、寂寥の境地に心を遊ばせた歌人、若山牧水の歌を

もここにのびは大きく、形は自由であり、第二行目に至って、春のの緊密

あけぼの

しんやうなほ

あけぼの

木村



草城の句 ● Haiku di Sojo

木村仁美

KIMURA Hitomi

出身一大正14年熊本県。師・榎倉香邨。昭和34年かな書道(故)中村庵石先生師事。40年正筆会(故)西谷卯木先生師事。40年日本書芸院無鑑査。42年日展入選。50年

日書道展委嘱。55年香環会榎倉香邨先生師事。61年読売書法展會友。62年西園朝日書道展評議員。平成6年読売書法展評議員。14年読売書法展幹事。學歷一昭和16年3月私立尚絅高等女学校。20年3月熊本県立第一高等女学校高等科第20回卒。



「草城の句」と題されたのは、俳句と書画を組み合わせた風雅な作品である。描き出された椿は、一輪一輪徐々に花を広げていき、待ちこがれた春を喜んでいくかのように見える。朱と墨の二色のみを用いているのにもかかわらず、濃淡の変化によって立体感が演出されている。

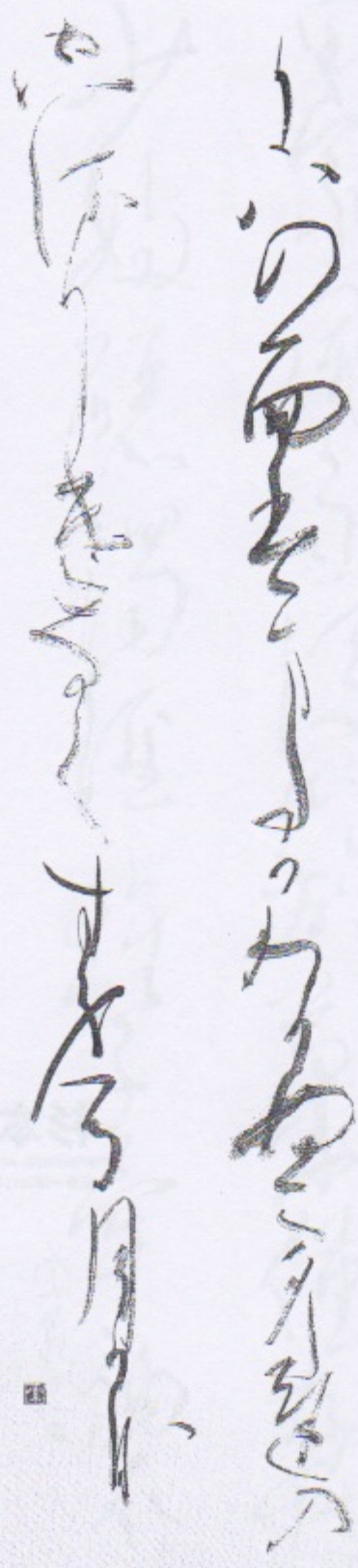
流麗な草書体で散らし書いた俳句、「あけぼのの白き雨ふる木の芽かな」は昭和初期の詩人、目野草城のものである。二行目の「し」を縦に長く空間をとって全体のアクセントとした。「木の芽かな」は絡みあうような繊細な線染が美しい。「茶室に飾りたい」との意図から作成したと作家は述べるが、まさに抹茶を飲みながら愛で、古人の心を味わうにふさわしい作品となった。

L'elegante raffinatezza di un'opera calligrafica

咲き匂う
書画の風雅

頼政の歌を依然と書している。頼政は平安末期の武将であるが、歌人としても名があり、『新古今和歌集』などの勅撰和歌集に採録されている。作者は頼政のこの理知的な歌をのびやかな筆質で書き、武将の勇名を表現したようである。墨色はあざやか、婉雅で、第一字を少し落として書き、自然に墨継ぎを

し、第一行目の間に対して第二行目は湯で書き始め、バランスを保っている。余白も右上と左下にとり、相対的なバランスを文字部分にも余白部分にも追究している。太めの線で表された穂やかな運筆は、こせついたところがなく自然で、観る者をゆったりとした気分にさせる秀逸な作品である。



庭の面 ● Spazio del giardino

斎藤素琴

SAITO, Sojin

出身—大正12年東京都。師・森本栢風、(故)西谷卯木、(故)森原録邦、書宗院参与理事、全日本書芸文化院常任理事、正筆会理事。既完書法展入選、書宗院展連続45年

出品・表彰される (2001年7月)、2001年7月ラドシン芸術賞受賞、12月正筆会同人部梅花賞受賞、プラハ国立美術館和の真蹟賞、2002年12月正筆会同人部神戸新聞社賞、2003年EXPO ARTEC美術探求賞 (フランス)、コートダジュール国際芸術賞、未來遺産賞。

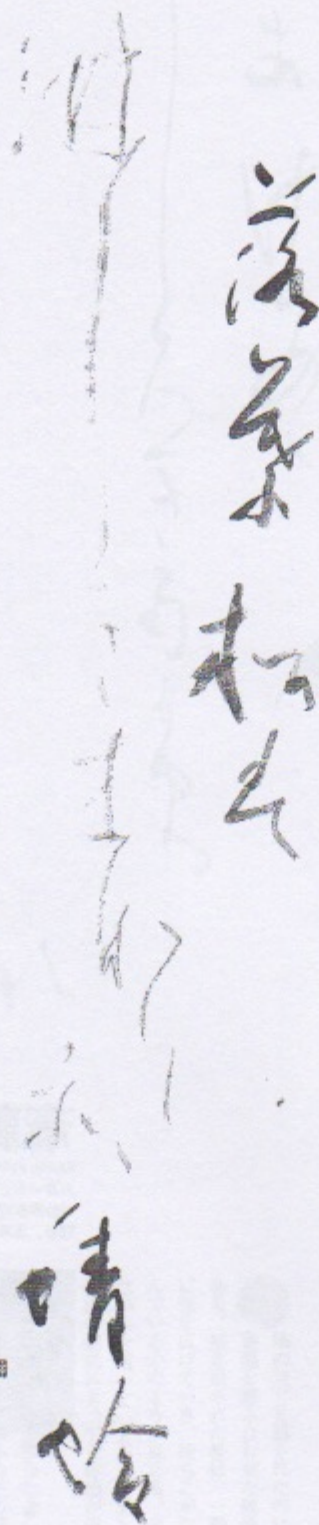


Lo stile energetico e disinvolto dei tratti di pennello

のびやかで
強い筆跡

⑤ わめて淡い墨を用いて、明治時代の詩人・河東碧梧桐の句を揮毫した。一行目の「落葉松は」は風に吹かれた木の枝のようにやや左に流し書き、「淋しき木なり」は消え入るような薄さをもって表現されている。同様の淡墨で、わずかに行をずらして「赤」を記した後、墨濃きして「蜻蛉」を書いたことで、その二文字だけが浮かび上がるような不

思議な印象を受ける。蜻蛉は体も羽も弱々しく、俳の代名詞のように用いられる虫の名である。この言葉が鑑賞者に与える印象を作家は十分に意識して運筆したのであろう。全体を通して、黒色の枯淡さ、線条の幽玄さなど、まさに句意と合致した雰囲気をもって生み出された作品である。



杉本幸泉

SUGIMOTO, Kiyomoto
出身一昭和11年千葉県。詩・米本一幸。

赤蜻蛉 ● La libellula rossa

La poesia della linea, semplice ma raffinata

枯淡な線が
詠む詩情

淡

墨による良寛詩の表現である。昔風も良寛を意識してか細い線でよどみなく連筆している。文字の一字一字は大きく、縦の流れが強調されている構成である。余白のとりかたは、その文字構成、墨色という要素を考慮した処理の仕方である。詩の内容をよくよく解したうえでの表現で、晩秋の風雨の激

しさによって菊の枝がわずかに残っているだけというイメージを、絶え間ない運筆の変化で表現している。処々につけたアクセントは雨の激しさを思わせ、第三句・第四句の詩意をその墨の色によって効果的に表現している。蕭条とした作品は、観るものをして深遠な境涯にいざなうものである。

奥山紫苑

OSUYAMA, Shion

出身一昭和9年大阪府。師・田中晩雨、(故)中川雨亭。読売書法会幹事、興文会理事、藝壇会副会長。グループ展年4～5回。

良寛詩 ● Poesia di Ryōkan
 思慕の風雨 菊の枝 僅存
 少女 疎 濁 海 花 子 年 物 衣

良寛詩 ● Poesia di Ryōkan

La malinconia che accompagna l'inchiostro diluito

淡墨が奏でる
寂寥感

本 白「塞下曲」五言詩を草書三行でまとめた作品である。書き出し三行、書き終わりの二行がびたっと整然と並んでおり、各行とも中心を貫いて正統派の遜色ない熟達した書であるといえる。文字は大小の変化に富んでいるが、密な調子で書かれ大きな文字のところで息を抜いていること、また行間にとった清潔感ある余白で絶妙なバランスをとっている。

「自詠詩」は、自詠の詩を書いたもので、スタイルというなら調和体である。自身の字で書いたのか、あるいは自身の字をいささかデフォルメしたのか知りたいが、朴訥な書風は現代日本人が好むところである。詩の内容も謙虚な日本人の精神を表している好感が持て、さらに自詠の詩ながら漢字と仮名とのつり合いもとれている。その構成も奇を衒うことなく、温かく素直で美しい。

川畑定崖

KAWABATA, Teigai
出身一昭和27年鹿児島県。読売書法会評議員、日本書院二科審査員。



白雲をまへと雲をまへるの 蓬草の田原は秋 さらけを信じて
 沈むる草花 葉は白く 花は赤く 葉は赤く 花は白く 葉は赤く 花は白く
 楓の葉は枝を耐え 霜を耐え 霜を耐え 霜を耐え 霜を耐え 霜を耐え

大自然のじよみの中で 生きている 自分を知るとともに
 素直な気持ちで 現われて 心が豊かになる 自然の流
 れに 逆らわず 只黙々と 努力を 続けたい 定崖

自詠詩 ● Una poesia composta da me

塞下曲 ● Poesia di Saika

Il calore di uno stile semplice

朴訥な書風の 温かさ

つしりした存在感ある十四文字を
二行にわたって書き下した一軸。
濃墨を用い、滂筆を巧みに取り入れ、線
条も変化に富んでいる。特徴的なのは随
所に見られる筆線のうねりであろう。線
の一本一本がまるで生き物のように動き
に満ち、見飽きることがない。楷書と行
書を織り交ぜたような独特な文字造形に
は言い知れぬ迫力がある。文字の大小に

も気を配っているのがわかり、起筆の
「青門」とそれに隣り合う「花」との対
比などにはそれが顕著である。個々の文
字は思うがまま自在に運筆されているよ
うであるが、一歩足を引いて全体に目を
向ければ、一貫した気脈とでも呼ぶべき
ものが培われていて、統一感が保たれて
いる。作家の卓越した書の腕を物語る作
品といえよう。

青門日暖蓬
花動紫陌
花動紫陌
青門日暖蓬

鈴木青雨
書

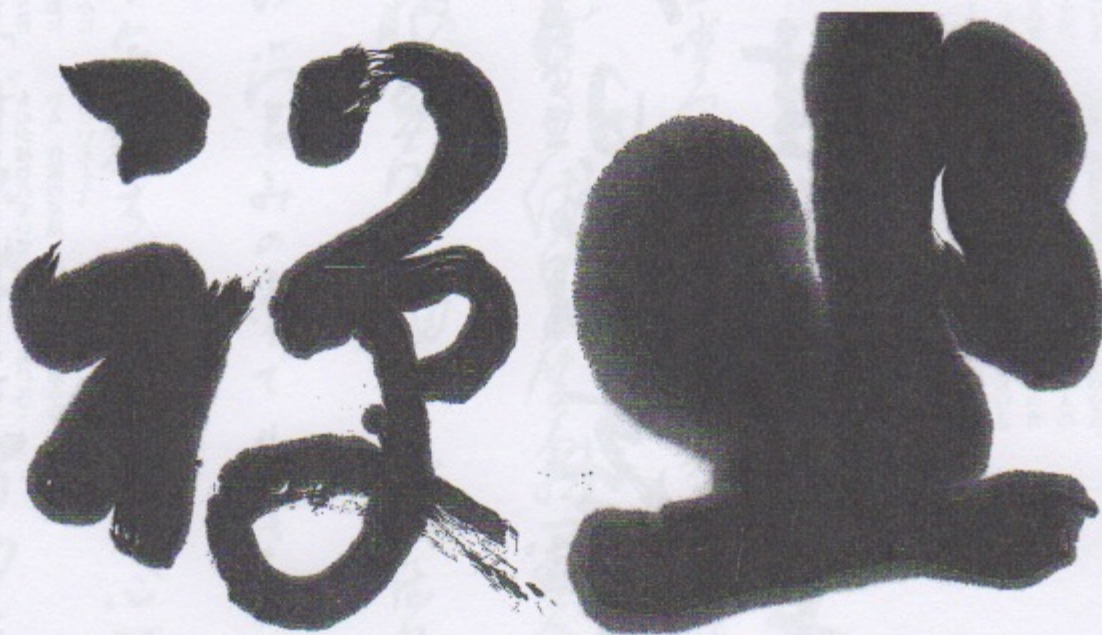
鈴木青雨

SUZUKI, Seiu
出身一大正15年山形県。

青門日 ● Poesia in stile cinese

Il mistero di un tratto di pennello pieno di vitalità

生動感漲る
運筆の妙



坐禅 ● Seduta zen

菅谷秀石

SUGAIA, Shōshōki

出身一昭和4年千葉県。師・手島右卿、大綱安漢。独立
展入選、コートジュール国際芸術賞（カンヌ）、未来
遺産賞（アヴィニオン）、グループ展25回。

ひと目見て、「坐」の潤沢な墨色の奥に心を引き込まれるような印象を受ける。薄めに磨った墨を長鋒にたっぷり含ませて、全身で料紙に筆を運ぶ作家の姿が想像できよう。途中で墨継ぎはなく、「禅」には潤筆から渴筆への移り変わりがうかがえて面白い。旁である「坐」の最終画にははつきりとした掠れを出し、右下へと跳ね下ろしている。潤濁だけでなく線条の太さ細さ、墨の濃淡など、二文字の対比は見るほどに味わいを増す。

坐禅とは精神を集中して悟りの道を求めることで、仏教では基本となる修行のひとつである。この語を選択し、運筆する作家の心もまた研ぎ澄まされ、雑念を持たず、ひたすら書の世界に入り込んでいるのが観る者にも伝わってこよう。

Il fascino e la dignità dello zen

凛とした
禅の潤い

作 者自身の文字に対する理念がこの作品を生み出している。文字の意味を大切に、筆と心と呼吸の一体化によって、古から今への継承が可能になり、新たな書が作られるというものである。「飛」は細い線が自在に走り、竹の節のような造形に特徴がある。湯筆が全面に表現され、筆画の多い文字に軽やかさを与えている。作者が大切にしている文

字の意味を考えた芸術的手法である。空を飛ぶ鳥を紙面に収めた個性表現派の一人といえる。鉄胆な気持ちを感じて「祭」を書いている。墨の色合いが美しく、上部が濃で下部にいくにしたがって淡になっていく。文字構成も堅苦しくなく、線質は枯淡であり、とりわけ示の部分の線の線は勁放である。



飛 ● Volare



祭 ● Festa

桑名桃華

KIYOHARA, Tohru

昭和32年生まれ。北フランス伝統創生大賞（リール）、アヴィニョン芸術大栄冠、コートダジュール国際芸術賞（カンヌ）、知の最優秀作家認定（デンマーク）。グループ展5回、外遊7回。

La bellezza e l'originalità dello stile calligrafico

個性が光る
字形の美

専精 厲意 虚心 平意 和晃 刻



専精厲意 © Senseirei

「**山** 精厲意」は丁寧な運力によって刻されていることがよくわかる。全体として安定感のあるオーソドキシな風である。疎密の関係が難しい字づらであるため章法の排列が困難であつたらうと思われる。ややもすると平板になりがちな構成を上部の左右の角を落として変化をつけている。横画は水平、筆画の太さは概ね均しく平正樸実な印である。

「**山** 虚心平意」を朱文で刻し、疎密の関係もよい。作品として成立させるのにより美的効果を備えている。文字は太めにまとめているが、処々に細い線を生かしており、「心」「平」の文字は左右相称のバランスをあえてとらず味をだしている。辺線は四方とも中心部分を壊しており、下方の余白部分をより広くみせている。また「虚」の上部の欠かし方は特徴的である。

鈴木美和子

SUZUKI, Miwako

出身＝昭和9年宮崎県。師・法元康州（仮名）、角井大拙（篆刻）。特選3回、漢字（鳥展）篆刻奨励賞8回、グループ展10回。



L'atmosfera e la semplicità del chiaroscuro

趣深い
素朴な陰影

まばあげ初め
前髪
林檎のもとに
見えーと
前髪
花飾の
花ある君と
思ひけ

藤村の詩
一九二六年

初恋 ● Il primo amore

谷内美津江

TANUCHI Mitsu
出身一昭和23年東京都。



瑞々しい
初恋を詠う

鳥

藤村の「初恋」の一節を書いている。近代日本の浪漫詩の代表で誰かが詠嘆した詩であろう。紙面は横長で言葉の塊を無視せず書いているところがよい。羊毛を使用して、意外な緑質を表している。墨量には変化はあるものの文字の形は一定していて、行も整然とならんでいる。八行すべての書き出しはそろっており、丁寧で読ませる書である。横画は水平で、なかには右下がりの文字もあるが、それがかえってモダンで穏やかな品を添わせている。また初々しい若者の恋心を、すっかり成長した人間が表現するということは、また味わい深い「初恋」への挑戦となる。年年歳歳、詩への解釈の深化が作品づくりへの欠くことのできない要素となり、これが意味あふれる線へとつながっている。

L'elegia di un giovane amore

L'ombra dei fiori delle quattro stagioni

- ①
Come sogno
al mattino, rami pendenti
e pallidi fiori,
si bagna l'asebo
nella pioggia di primavera.
- ②
Tristezza,
da lontane oscurità
sgorgando,
forte mi prende,
mentre silenziosi
cadono fiori di ciliegio.
- ③
Ortensie,
come stufe
per ciò che erano ieri,
multiformi
si riflettono ora nella pioggia.
- ④
Tra luce e ombra
alla mia finestra,
di colpo un'estate.
Memoria di mio padre,
l'ibisco bianco fiorisce.
- ⑤
Rosse e azzurre
campanule
facendo fiorire
si rallegrava mia madre,
anche lei, a questo mondo mancata.

- ① 夢のごと朝枝垂れて花淡き馬酔木は濡るる春雨の中
- ② 憂鬱は遠い闇よりこみ上げて熱く静かに桜花舞ふ
- ③ 紫陽花は昨日の自分に飽きしごと変幻自在いま雨に映ゆ
- ④ 照り翳り窓にすくっとひとひと夏を父の形見の白木槿咲く
- ⑤ 朝顔の花を咲かせて青、赤、と欬びてゐし母も世に亡し

四季の花影

花 影とはなんとオリエンタルな響きを持つものか。蕭条とした心模様がついて離れぬような歌や、季節の花々に事寄せて偽りのない情を歌にしたためたものばかりである。歌を哲理の手段として用いることは愚かであり、人の直情を表すことが至上であるとした歌人がいたが、これらの歌は花に自らの情を映したものである。

「夢のごと……」はこころ喪中の日に詠んだということだが、馬酔木の形状や、「夢」垂れて、「淡き」「濡るる」「春雨」と悲しみ、はかなさを連想させる言葉で畳み込んである。また第二句の字余りによる余情の手法も効いていて、春という暖かなイメージの対極を表現してその悲しみをより引き立たせたところなどはすばらしい。

鶴田美智子

TSURUTA, Michiko

出身一神赤川県。師・宮枝二、鈴鹿俊子。歌誌コスモスに所屬。



Rappresentazione della spiritualità profonda

奥深い
精神性の表出

⑥
Fiori viola minuti,
d'improvviso
mettono frutti
purpurei e corposi.
Oh care melanzane!

⑦
Casa in cui per primo
un figlio è mancato.
Rassegnati ormai
alle sole foglie...
la viola irta, fiorisce.

⑧
Nel misero giardino
ormai appassito,
abbondanti fioriscono
le camelie,
profonde ombre scarlatte.

⑨
Consultato
l'oracolo... *Suekichi!*
il segno migliore...
Allegata,
un'ode alla violetta.

⑩
Come tutto ciò che è bello,
in un batter d'occhio
svanisce,
sparsi sul tavolo,
caprifogli rossi.

⑥ むらさきの小花いつしか紫の濃ゆき実をつく茄子は親しも

⑦ 子が先に逝きし家なり葉のみ伸び諦めかけし不如帰咲く

⑧ うら枯れし狭庭ゆたかに寒椿は唐紅の陰深く咲く

⑨ 末吉の一番といふおみくじを引けば菫の歌添へてあり

⑩ 良き事は瞬く間にぞ過ぎゆくか机上に零るる紅き忍冬

「むらさきの…」はなんとも声調がいい。紫陽花を擬人化して時空のなかに織り込んで昨日という時間、今という時間を与えているところに作者の紫陽花に対する思いを窺うことができる。最後は目に映った感動で強調され完成されている。

「むらさきの…」現代短歌の象徴のような歌でむらさきを二重に使用したり、花と実を一首に詠むという発想がおもしろい。「親しも」の言葉遣いは古代調で素朴な感情を凝集するものである。

「うら枯れし…」は彩りの乏しい冬の庭に深紅の寒椿が緑の葉のうちに映えている。そんな景色が眼前に浮かんでくる。「陰深く咲く」は意味深長で繊細な感性が冴えている。結句性に満ち、作者内部の美意識はすぐれた語感によって独自の世界を築いている。

「詩人の目指すところはメラヴィリアにあり」
——ジャン・バッティスタ・マリノー(バロック時代の詩人)

La meraviglia

dell'arte per diletto
un ponte tra Giappone e Italia

Scuola Grande di S.Giovanni Evangelista

S.Polo 2454 30125 venezia

Dal 18 al 20 Giugno 2005

June 18th to 20th, 2005 in VENEZIA

2005年6月18日(金)~20日(日)

第
三
回
日
伊
芸
術
驚
異
と
美
の
饗
宴